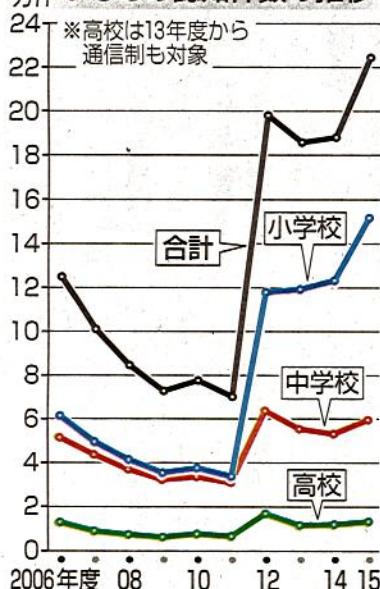


いじめの認知件数の推移



全国の国公私立の小中高、特別支援学校が二〇一五年度に把握したいじめは二十二万四千五百四十件で、前年度から三万六千一百六十八件増えて過去最多となつたことが、文部科学省の問題行動調査で分かつた。文科省は「件数増は、積極的な把握に努めた結果だと捉える方針が浸透したため」と分析している。年間で三十日以上、欠席した不登校の小学生も千七百十七人増の一万七千五百八十一人と最多を更新。中学生は三千三百九十五人増の一万八千四百二十八人、高校生は三千五百六十五人減の四万九千五百九十一人だつた。

いじめは、小学校が十五

万一千九百六十件（二万八千多。中学校は五万九千四百四百五十六件増）で過去最二十二件（六千四百五十一

件増）、高校は一万一千六百五十四件（千二百五十件増）だった。内容は全体の63・5%を占めた「冷やかしや悪口」が最多で「パソコンや携帯

電話でのひぼう・中傷など）は4・1%。現在の状況は、88・6%でいじめは解消し、1・9%が解消に向けて取り組み中だった。

児童生徒が心身に大きな被害を受けるなど、いじめで「弱いな」と言われた事実を問題では、いじめを訴える遺書が残されていたが、暴力や仲間外れなどの執拗ないじめは確認できなかつた。一件ずつなら必ずしも重大にはみえない周囲の言動が、積み重なれば子どもを追い詰めかねない。どうすれば「ささいないじめ」に早く気付けるのか。重い課題が教育現場に突きつけられている。

「遺書に『いじめ』と書かれていなければ、見過しては検証作業を振り返り、見えにくいじめを把握する難しさを口にした。市教委の有識者会議は報告書

いじめ最多22万4540件

15年度 不登校児童2万7581人

全国の国公私立の小中高、特別支援学校が二〇一五年度に把握したいじめは二十二万四千五百四十件で、前年度から三万六千一百六十八件増えて過去最多となつたことが、文部科学省の問題行動調査で分かつた。文科省は「件数増は、積極的な把握に努めた結果だと捉える方針が浸透したため」と分析している。年間で三十日以上、欠席した不登校の小学生も千七百十七人増の一万七千五百八十一人と最多を更新。中学生は三千三百九十五人増の一万八千四百二十八人、高校生は三千五百六十五人減の四万九千五百九十一人だつた。

いじめは、小学校が十五

万一千九百六十件（二万八千多。中学校は五万九千四百四百五十六件増）で過去最二十二件（六千四百五十一

件増）、高校は一万一千六百五十四件（千二百五十件

増）だった。内容は全体の63・5%を

占めた「冷やかしや悪口」が最多で「パソコンや携帯

電話でのひぼう・中傷など）は4・1%。現在の状況は、88・6%でいじめは解消し、1・9%が解消に向けて取り組み中だった。

名古屋市西区で昨年十一月、中学一年の男子生徒が自殺した問題では、いじめを訴える遺書が残されていたが、暴力や仲間外れなどの執拗ないじめは確認できなかつた。一件ずつなら必ずしも重大にはみえない周囲の言動が、積み重なれば子どもを追い詰めかねない。どうすれば「ささいないじめ」に早く気付けるのか。重い課題が教育現場に突きつけられている。

「遺書に『いじめ』と書かれていなければ、見過しては検証作業を振り返り、見えにくいじめを把握する難しさを口にした。市教委幹部は「教諭が同じ言葉でも人によって受け止め方が違う」ことを敏感に感じ取り、生徒たちが理解できるよう指導していかなければ」と話す。

市教委は今月、市立小中学校、高校、特別支援学校の全教職員に、学校現場の問題点を洗い出す点検表を配布した。「子どもを見守る観察力、洞察力、

で、体形に関する悪口や、部活動の「弱いな」と言われた事実をいじめと認定した。苦痛を感じていた言動や、学校でのストレスが積み重なったとする複合的要因を指摘。教室や部活に安心できる環境がなく、孤立感や疎外感を深めていったと結論づけた。市教委幹部は「教諭が同じ言葉でも人によって受け止め方が違う」ことを敏感に感じ取り、生徒たちが理解できるよう指導していかなければ」と話す。

不登校の要因は家庭内

の問題のほか、学校に関わる

ものでは友人関係、学業不

振が多かった。不登校の口

数別内訳も初めて調査項目

に追加。小中学生の計十二

万六千九人のうち、57・4

%の七万二千三百二十四人

は欠席日数が九十日以上、

うち四千四百一人は出席日

数がゼロだったことも判明。

長期の不登校が続く児

童生徒への対応が改めて問

われそうだ。

暴力行為は小学校で一

五倍に急増、一万七千百三

十七件と過去最多を更新

し、一、二年生の加害児童

数が七割以上増えた。